

「ハヌカの祭り」の現代的意義



ベレーシート

●第七回「ヘブル・ミドゥラーシュ例会」は、前回に引き続いて、「聖書における光についての概念」を共通テーマとしました。12月には「光の祭典」と呼ばれるユダヤ教の「ハヌカの祭り」(12.7~12.14)があり、この祭りの八日間を「光」の瞑想の時として、最終日となる14日(月)に例会をもってそのことを分かち合うことにしましょう、ということでした。

●空知太栄光キリスト教会(以下、空知太教会と略します)では、この期間を「ハヌカの祭り」の瞑想期間として聖別し、おもに旧約聖書の続編の中にある「マカバイ記」を読むことでこの祭りの由来となった歴史的背景を知ることに努めました。果たして、この「ハヌカの祭り」は、神のご計画の全体的視点をもつ「御国の福音」においてどのような意義を有するのかを思い巡らす時となりました。空知太教会では2006年からクリスマス集会なるものを持っていません。それは12月25日にイエシュアが誕生したとは考えられず、イエシュアの誕生をクリスマスとして制定したのは、当時のローマ教会の宗教的・政治的戦略によるものであることと同時に、ユダヤ的ルーツが切られたこととも関係することだと知ったからです。かといって、イエシュアの誕生を記念するふさわしい日をいつにするかについては、長い間、迷いの中にありました。しかし9年後の今年(2015)から、ユダヤの「仮庵の祭り」と同じ時期、空知太教会では「セレブレイト・スッコート」なる祭りを教会としてすることを決定し、その期間にイエシュアの誕生を祝うこととしました。

●12月のクリスマスは、ローマ皇帝ならびに当時の教会会議によって制定されたものとして今日まで続けられて来ています。また、同じ時期の12月にもたれるユダヤ人たちの「ハヌカの祭り」(あるいは、「宮きよめの祭り」)は、B.C.165年に制定され公文書としてユダヤ人に発布されてから今日まで続けられているのです。

●「ハヌカの祭り」は別名「光の祭典」とも呼ばれますが、この祭りの由来には、「光」とはなんの関係も実はありません。この祭りの歴史的背景を記した「マカバイ記」(上下)の中には「光」についての言及はひとつもありません。むしろ、この祭りは、ギリシアの王アンティオコス4世エピファネスによって汚された神殿をきよめて、神に再奉献した出来事であることが分かります。ですから、「光の祭典」とあるのは伝説の域を出ないことが分かります。しかし、瞑想を続ける中で、「ハヌカの祭り」が示唆していることは、むしろ「光」と大いに関係があると考えようになりました。つまりこの祭りが真に示唆していることは、神のヴィジョンである神の家(神殿)についての理解を深めるためには、上からの光をより多く必要としているということです。

●神殿においては金で出来た七つの枝を持った燭台「メノーラー」(מְנוֹרָה)が置かれていますが、「ハヌカの祭り」で用いられる燭台は九つの枝で出来た「ハヌキヤー」と呼ばれる燭台で、ハヌカの祭りにしか使われな

い、いわば期間限定使用の燭台なのです。9本ある蠟燭のうち、8本は正規の蠟燭ですが、あとの1本は火種としての蠟燭です。八日間にわたる祭りにおいて第一日目は1本、第二日目は2本・・・と、日を追うごとに蠟燭に灯される蠟燭の火の数で明るさは増し、祭りの最終日にはすべての蠟燭が灯されることとなります。このことを別の視点から見るならば、「ハヌキヤー」は、奥義としての神のご計画の悟りが、終わりの日が近づいてつれて、時の経過と共に光の量が増し加えられて開示され、やがて八日目には、神のご計画の全体が完成するという預言的なしるしとしての燭台とも言えます。そのようにこの祭りを理解するならば、この時期に静まって瞑想することはきわめて意義のあることだと考えます。



●さて、今回の私の Hebrew Midrash は、「ハヌカの祭り」の八日間の瞑想を試みたその結論として、「**ハヌカにおける三つの瞑想のテーマ**」を、瞑想の指針として提起したいと思います。以下に掲げる瞑想テーマを毎年継続することで、キリストの花嫁である教会が整えられていくと信じます。

- 1. ヘレニズムとヘブライズムの相克
- 2. 家庭教育における信仰の継承という大事業
- 3. 聖書の献身の再吟味

1. ヘレニズムとヘブライズムの相克

●ギリシアの支配下に置かれたユダヤ人たちは、バビロン捕囚時代やメディア・ペルシア時代とは異なる危機にさらされることとなります。その危機とはヘレニズム文化が強要されたことです。それはユダヤ人の存在のアイデンティティを根底から否定されるという危機でした。つまり、反ユダヤ主義の台頭です。

| バビロン | ペルシア | ギリシア |
|--|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ●捕囚という憂き目がもたらした祝福は、神のトラーに対する開眼。 ●二代・三代を通して「トラーライフスタイル」が確立された。 | <ul style="list-style-type: none"> ●ユダヤ人をサポートする政策が取られたことで、エルサレムに神殿が再建された。 ●ハマンによるユダヤ人絶命計画からも守られた。 | <ul style="list-style-type: none"> ●最初はそれぞれの民族の宗教に対して柔軟であったが、ある時期からユダヤ人の神殿を汚し、ヘレニズム化が強力に推進されたことで、ユダヤ人が二分された。 |

●マカバイ記上1章10節に「そしてついには彼らの中から悪の元凶、アンティオコス・エピファネスが現れた。」とあります。「彼らの中から」とは、ペルシア帝国を打ち倒して世界を征服したマケドニア(つまりギリシア、聖書では「ヤワン」と称されます)のアレキサンダー大王とその武将たちとその子孫からという意味です。その中から「悪の元凶、アンティオコス・エピファネス」が現れたのです。「エピファネス」とは「現人神、あるいは、現神王」という意味ですが、アンティオコス4世は自分を呼ぶ呼称として「エピファネス」と

HEBREW MIDRASH No.7

呼ばせていたようです。しかしユダヤ人は「エピマネス」(気違い)と陰口をたたいていたと言われます。

●「悪の元凶」は新共同訳の訳語ですが、フランシスコ会訳は「一本の罪深い芽」、バルバロ訳は「悪の根」と訳しています。それは彼がユダヤ人たちやエルサレムを武力でヘレニズム化させようとしたことを意味しています。しかも、それに従わないものを死刑にしたのです。そのために、「こうして彼らは異邦人の流儀に従ってエルサレムに錬成場(=体育館、競技場)を建て、割礼の跡を消し、聖なる契約を離れ、異邦人と軛を共にし、悪に身を引き渡した。」(1:14~15)とあります。エルサレムがヘレニズム化された都となるためには、錬成場(=体育館、競技場)を築くことは必要条件であったようです。当時の競技は裸でなされたために、すでに割礼を受けていた者は特別な手術で無割礼の状態に戻したようです。また、割礼を受けないことはユダヤ教の放棄を明らかにすることでした。アンティオコス4世エピファネスは、すべての人々が一つの民族となるために、おのおの自分の慣習を捨てるように、勅令を発しました。彼がしたことをまとめてみると、以下のようになります。

- (1) 安息日を汚したこと。
- (2) 主の例祭と聖なる日を汚したこと。
- (3) ギリシアの偶像(ゼウス)を祭壇に置いて拝ませたこと。
- (4) 祭壇には豚の血をささげたこと。
- (5) 聖書で禁じている不浄な食べ物を食べさせたこと。
- (6) 割礼を禁じたこと。
- (7) トーラーの学びを禁じた。

●上記の内容に違反した者はすべて死刑に処しました。このようにして神を拝むユダヤ人を徹底的に迫害したのです。またユダヤ人の中にはギリシアと手を結ぶ者たちがいたことも事実です。ヘレニズム化が推し進められたことで、ユダヤ人が二分されたのです。これはバビロン時代にも、メディア・ペルシア時代にも見られないことでした。このような迫害を私たちはどのように思うでしょうか。キリスト教の歴史において、このアンティオコス4世・エピファネスと同様なことをしてきた者たちがいます。それはローマ・キリスト教会です。ユダヤ人を排斥し、彼らの社会的地位を剥奪し、彼らの伝統とそのルーツを断ち切り、世界に離散させた反ユダヤ主義です。これが置換神学を生みました。

●はからずも、ちょうど2年前の今頃(12月)、ダビデ・リー師の「**なぜ私たちはヘブル語を学ぶ必要があるのか**」というテーマでもたれたセミナーは私にとって衝撃的でした。神はなぜイスラエルを回復させられたのか。その目的の一つとして考えられることは、**ズバリ、ヘブル語の復興**です。二千年近い年月において、ヘブル語は日常語としては使われることはありませんでしたが、国としての復興とともに、ヘブル語をも復活されたことだと語られました。そもそもヘブル語は神のことばであり、それは神の概念を最も適確に伝えるための言語だと紹介されました。そしてこのセミナーの中で、リー師はゼカリヤ書9章12~13節を引用しました。

12 望みを持つ捕らわれ人よ。とりでに帰れ。わたしは、きょうもまた告げ知らせる。

わたしは二倍のものをあなたに返すと。

13 わたしはユダを曲げてわたしの弓とし、これにエフライムをつがえたのだ。

HEBREW MIDRASH No.7

シオンよ。わたしはあなたの子らを奮い立たせる。

ヤワンはあなたの子らを攻めるが、わたしはあなたを勇士の剣のようにする。

●ゼカリヤ書 9 章は、メシアの初臨と再臨、そして全イスラエルが長子としての権利を回復することが預言されているきわめて重要な章です。全イスラエルはここでは「望みを持つ捕らわれ人よ。」と呼びかけられ、メシアが君臨される「とりでに帰れ」と語られます。「とりで」とはエルサレムのことです。そして全イスラエルは、神の長子としての権利を回復されます。そのことを聖書は「二倍のものを返す」と表現しています。なぜなら、長子の権利は「二倍の祝福」を受けることだからです。そして主は、「シオンよ。わたしはあなたの子らを奮い立たせる。ヤワンはあなたの子らを攻めるが、わたしはあなたを勇士の剣のようにする。」と呼びかけています。

●ここで出て来る「ヤワン」ということばは、「ギリシア人」のことを意味しています。「ギリシア人とは、ヘレニズムの文化をもった、いわば人間中心主義の世界観を象徴しています。そのヤワンが「あなたの子らを攻める」とは、ヘブライズムの神中心主義の世界観を攻撃するということです。しかし、神は「わたしはあなたを勇士の剣のようにする」と預言しています。特に「終わりの時代」においては、**ヘレニズムに対抗できる唯一の道はヘブライズムに立つことです。それ以外の道はありません。**神はその道を回復しようとしておられるのです。それに参与するためにも、ヘブル語を学ぶことはとても価値ある取り組みと言えるのだ。」と、ダビデ・リー師は語っておられました。

●ヘレニズムは今や全世界に浸透している人間中心の文化です。このヘレニズムと対抗するのが神中心のヘブライズムです。思惟概念の相克(衝突)です。使徒パウロは前者を「この世の知恵」と呼び、後者を「神の知恵」と呼んでいます。この両者には何のつながりも、まじわりも、調和も、かわりも、一致もないことを強調し、「つり合わぬくびきをいっしょにつけてはならない」と述べています(Ⅱコリント 6:14~18)。これはやみと光との衝突であり、御国が完全に到来する日まで続きます。マカバイ記はこのテーマを扱っている書だとも言えます。その視点から「ハヌカの祭り」を考えるなら、単なるユダヤの祭りの域を超えた、神の民としての今日的課題を持った祭りとなり得ると信じます。

●**ヘレニズムとヘブライズムとの相克(衝突)は、古くて新しい問題です。**今日の教会において、従来の置換神学からヘブル的視点による聖書解釈に目が開かれてきている現象は、ヘブライズムの台頭と言えます。

2. 家庭教育における信仰の継承という大事業

●はからずも、空知太教会では、「サムエル・ミニストリー」で「箴言」を瞑想しはじめています。私はこの箴言を主にある「家庭教育」の最高のテキストだと考えています。特に、箴言の中で、父が自分の子(たち)に対して語っている「さとし」の部分は重要です。主を恐れて、自分に授かった子どもをトラーによって養育するという姿勢に貫かれているからです。事実、箴言の中には「父のさとし」というまとまった教えが 1 章か

HEBREW MIDRASH No.7

ら7章にかけて9箇所も記されているのです(「新共同訳聖書」はそれを小見出しとして付記しています)。

●信仰の継承を目的としてスタートした「ヒナヤーフ・ミニストリー」は今や継続中です。これは今日の教会において難事業であると同時に、優先度の高い大事業です。教会教育の前に家庭教育ありきなのですが、その部分が今や崩壊寸前の危機的状況にあります。

●マカバイ記を読む中で、アンティオコス4世エピファネスによるヘレニズム化への強要に対して強硬に対決したのは、マタティアという父とその5人の息子たちです。ヘレニズム化に傾くユダヤ人が多く起こって来る中で、マタティアと5人の息子たちはそれに同調しなかった者たちを代表する一家でした。彼らはこの戦いのために最後は全員殉教しますが、彼らの戦いはまさにヘブライズムを継承する戦いであったと言えます。

●父マタティアの死期が近づいた時、彼が息子たちに語った訣別説教が光を放っています。「今は高慢とさげすみのはびこる、破滅と憤りの世だ。お前たちは律法に情熱を傾け、彼らの先祖の契約にいのちをかけよ。我らの先祖がそれぞれの時代になした業を思い起こせ。そうすればお前たちは、大いなる栄光と永遠の名を受け継ぐことになる」と言って、アブラハム、ヨセフ、ピネハス、ヨシュア、カレブ、ダビデ、エリヤ、「ハナンヤ、アザルヤ、ミヒヤエル」(おそらく、シャデラク、メシャク、アベデネゴのこと)、ダニエルといった信仰の勇者たちの名を挙げながら、マタティアは息子たちに言います。

61 それゆえ代々にわたって次のことを心に留めよ。神に希望をおく者は決して力を失うことはない。

62 罪人の言葉を恐れてはならない。彼の栄光など塵あくたや蛆虫に変わってしまうだろう。

63 彼は、今日は有頂天になっているが、明日には影すら見えなくなる。元の塵に戻り、そのはかりごとは消えさせる。

64 お前たちは、律法をよりどころとして雄々しく強くあれ。律法によってこそお前たちは榮譽を受けるのだ。

65 見よ、お前たちの兄弟シモンは知略にたけた男だ。いつも彼の言うことを聞け。シモンはお前たちの父となるであろう。

66 ユダ・マカバイは若年のころから剛の者である。彼を軍の指揮者として仰げ。彼は諸国民との戦いを戦い抜くであろう。

67 お前たちは、律法を実践する者全員を集め、民のために徹底的に復讐することを忘れるな。

68 異邦人たちには徹底的に仕返しし、律法の定めを固く守れ。」

●マタティアの訣別説教(遺言)で教えられることが三つあります。

第一は、拠り所がこわされたなら、何もできないということを確認していたことです。それゆえ息子たちに「律法をよりどころとして雄々しく強くあれ」と命じました。そして、神に希望をおくものは決して力を失うことはないと言いきなすを授けました。

第二は、人間の栄光とはかりごとは消え失せるということでした。それゆえ、「罪人のことばを恐れてはならない」と命じました。事実、アンティオコス4世エピファネスの栄光とそのはかりごとは消え失せました。

第三は、息子たちの賜物(リーダーとしての資質)を見抜いていたことです。シモンは戦いの策士として、またユダは統率者としての資質を見抜いて、他の者はその二人に聞き従うように命じたのです。

HEBREW MIDRASH No.7

●このような訣別説教を語ることでできる父親はすばらしいです。まさに箴言における「父」の姿を彷彿とさせます。このような主にある家庭教育が建て上げられていく必要があります。これは日本のキリスト教会における緊急の今日的課題ではないかと思えます。

●トラーに情熱を傾けた祭司の一家、および、彼らに影響を受けて戦った者たちの働きによって、汚された神殿は奪回され、聖別されて再奉獻されることとなります。そのことを見た子どもたちは、**ドレイデル**という駒を作って遊ぶようになったと言います。その駒は四角錐の形をしており、その四面には四つのヘブル文字が書かれてあった。その四つの文字とは、「ヌーン」(נ)、**「ギメル」**(ג)、「ヘー」(ה)、「シン」(ש)で、これは、「ネース・ガードール・ハーヤー・シャーム」(**נֶס גָּדוֹל הָיָה שָׁמַיִם**)の四つからなる単語の頭文字です。意味は「大いなるしるしがそこにある」です。「しるし」の「ネース」(נֶס)は「旗」を意味し、その旗とは神による勝利の旗という意味です。「アドナイ・ニシ」(出 17:15)がそれです。神による勝利は常に「奇蹟」を伴っていたので「ネース・ガードール」で「大いなる奇蹟」とも言われます。「そこに」とは律法(トラー)の中に、という意味です。



●子どもたちは、敵の兵士が近づくとトラーを隠して、駒で遊んでいるように見せかけ、敵の兵士が去ると、またトラーを出して学ぶことをしたそうです。実に賢い子どもたちです。滝廉太郎の「お正月」という歌があります。「もういくつ寝ると お正月 お正月には 凧あげて こまをまわして 遊びましょう はやく こいこい お正月」とありますが、いのちを賭けた戦いから生れたユダヤの子どもたちが考案した駒遊びを考えるなら、あまりのレベルの違いに驚かされます。この遊びは現代のユダヤにおいてもなされているようです。



●信仰の継承を目的としたミニストーリーとして、「ヒナヤーフ」(**הַנִּיב**)があります。これも「ヒンネー・ナハラット・アドナイ・バーニム」(**הִנֵּה נְחֻלַּת יְהוָה בְּנִימִים**)という詩篇 127 篇 3 節にある「見よ。子どもたちは神の賜物である」の四つの言葉の頭文字を取って作った言葉です。信仰の継承は難事業であると同時に、最重要課題です。「ヒナヤーフ」のミニストーリーにおいても、同じように駒を作って双六遊びを考案するような心意気を持ちたいところです。

3. 聖書的献身の再吟味

●マタティアが死んだ(おそらく病に倒れた)後、5人の息子たちの中の三男のユダが父の後を継ぎます。彼は意志強固で勇気のある有能な指導者であったことが、マカバイ記上 3~4 章を読むと分かります。4 章 38~59 節には、汚されたエルサレム(シオン)の神殿と祭壇をきよめて、再奉獻したことが記されています。この「再奉獻」こそ、「ハヌカの祭り」の由来となった出来事です。時は**西暦 B.C.164 年**(バビロニア式セレウコス暦、すなわち、マカバイ記に記されている暦では第 148 年)です。

HEBREW MIDRASH No.7

●ちなみに、「ハヌカ」の祭りは、旧約聖書に記されている「主の例祭」には含まれていません。なぜなら、この祭りは旧約聖書がまとめられた後に起った、マラキからイエシュアまでの「中間時代」と呼ばれる時期に実際に起った歴史的出来事に由来するものだからです。「ハヌカの祭り」とイエシュアとの関係については、ヨハネの福音書 10 章 22～23 節に、「そのころ、エルサレムで、宮きよめの祭りがあった。時は冬であった。イエスは、宮の中で、ソロモンの廊を歩いておられた。」とあります。イエシュアの行動にはすべて御国に関する何かが隠されていると考えるのは自然です。新改訳は「ハヌカの祭り」のことを「宮きよめの祭り」と訳していますが、新共同訳は「神殿奉献記念祭」と訳しています。こちらの訳の方がこの祭りの内容をよく表わしていますが、正確を期すならば、「神殿再奉献記念」とすべきです。「再」という文字が「宮きよめ」とつながるからです。ギリシア語原文では「エグカイニア」(ἐγκαίβια)となっており、それは「宮きよめ、再奉献」という意味です。冬の時期のこの祭りのために、イエシュアがエルサレムに行かれたことで、この祭りがイエシュアにとって重要な祭りであったことをうかがわせます。ここではイエシュアが神のヴィジョンである神の家(神殿)を建て上げるための使命を再確認する時としてエルサレムに行かれたのではないかと推察します。

●「ハヌカ」の原語情報について、「ハヌカー」(「ハヌッカー」חֲנֻכָּה)は「ハーナフ」(חֲנֻף)の名詞で、旧約では「奉献」という意味で 12 回使われています。動詞の「ハーナフ」(חֲנַף)は神殿のみならず、祭壇、新しい家、そして自分の子を主にささげることを意味します(申命記 20:5/ I 列王記 8:63/ II 歴代誌 7:5/箴言 22:6)。ちなみに、新しい家とあるのは新しい主にある家庭を主にささげるこの意味であり、子を主にささげるということは子を主の道を歩むべくふさわしく教育(訓練)することを意味します。まさに「ハヌカ」の奉献の儀は、**神の主権的支配に対する献身の表明と言えます**。「ハヌカの祭り」にはこうした信仰的献身の表明が含まれているにもかかわらず、イエシュアがこの世に来られた時代の神殿は、大祭司を初めとする指導者たちが神のトラーの道から外れて、人間の教え(解釈)と制度化した宗教の中で安逸をむさぼっていた現実があります。それゆえ「ハヌカ」の献身的精神は、イエシュアの時代のみならず、いつの時代にも必要とされるものなのです。この献身的精神が発動される背景には、必ずと言ってよいほど指導者たちの霊的墮落があるのです。その意味において、この神殿再奉献の出来事の今日的意義として、最後に、ローマ人への手紙 12 章 1～2 節にある使徒パウロのことばと関連させて考えてみたいと思います。

【新改訳改訂第3版】ローマ書 12 章 1～2 節

1 そういわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。

あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。

それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。

2 この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、

神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえるために、心の一新によって自分を変えなさい。

●1 節の主動詞は、「勧めます」と訳された「パラカレオー」(παρακαλέω)です。ここでパウロは何を勧めているのかと言えば、「あなたがたのからだをささげること」です。あとはそのことを説明する修飾的なことばが付随しています。つまり、パウロが勧めているのは、**献身の勧め**です。このことと「礼拝」とは同義なのです。したがって、献身なき礼拝はあり得ないという事になります。私たちはもう一度、自分のからだを神に

HEBREW MIDRASH No.7

ささげるとはどういうことかを知らなければなりません。そのことを述べている箇所が2節です。

●「ささげなさい」という動詞「パリスターミ」(παρίστημι)は、「そばに」という意味の前置詞「パラ」(παρα)と「立つ」を意味する「イスターミ」(ίστημι)の合成語です。「ささげること」は、靈的な(=「理になかった、あまりに当然な」の意)礼拝とイコールです。あなたがたのからだを「聖い、生きた供え物としてささげる」とは、神に喜ばれるなだめの供え物、すなわち、自発的な供え物として自らをして神の前に立たせるということの意味します。これこそが、まことの献身であり、靈的な礼拝なのだと思徒パウロは私たちに語っています。

●「ささげる」ということについて挙げておきたいもう一つの箇所は、パウロが愛弟子テモテに宛てた手紙の中にあります。

【新改訳改訂第3版】Ⅱテモテ 2章 15 節

あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。

●ここにもローマ書 12 章 1 節と同様に、「パリスターミ」(παρίστημι)という動詞の不定詞が使われています。不定詞とは動詞を名詞化したものです。ここでの主動詞は「努め励みなさい」(「熱心に努めなさい」というアオリストの命令形です。アオリストの命令形は、ヘブル語の強意形のヒットパエル態に相当します。つまり、主体的に、自覚的に、自発的に～をせよ、という意味になります。

●ローマ書 12 章 2 節には二つの命令形があります。ひとつは「調子を合わせるな」という現在形の命令、もうひとつは「(心の一新によって自分を)変えなさい。」という現在形の命令です。現在形の命令とは、常に・・・し続けなさい」という意味です。新改訳は「心の一新によって自分を」とありますが、ここでの「心」とは、心情や感情のことではありません。ギリシア語の「ヌース」(νοῦς)も、ヘブル語訳の「レーヴ」(לֵב)も、知性や考え、思考を意味します。つまり「思考を一新する」とは、思考の座標軸を神中心へと移すことを意味します。みことばを時代精神によって解釈せず、本来の神の概念をもってみことばを解釈することを自分に課すことです。

●聖書をヘブル的視点から説き明かすことは、そう簡単なことではありません。地道な学びの積み上げが求められます。気合や一念発起の頑張りではできないことです。継続的な積み上げをしながら、毎年八又カの時期を(一年の終わりに)、自らを吟味する機会として、神に再献身する機会として聖別するならば、「八又カの祭り」は今日的意義を持ってくると信じます。

The 7th HEBREW MIDRASH

2015. 12.14 銘形 秀則